

序

形井秀一
筑波技術大学

10年は一昔と言われた。しかし、今では、数年で「昔」になってしまいそうな程、社会のサイクルは早くなってしまった。だが、やはり、10年は10年である。

『社会鍼灸学研究』の発刊は9年間継続でき、遅ればせながら、『社会鍼灸学研究 第10号』を発刊する。10年間の長いのか短いのかという問題よりむしろ、この10年間に社会鍼灸学研究会が目指したのや、社会鍼灸学がなしてきた、あるいはなせずに来たことそのものが問われ、さらに、10年間に発信したことが、日本の、あるいは世界の鍼灸界に何らかの意味があったのか否かの方が、発せられるべき問いである。

では、社会鍼灸学が目指してきたものは何であったのか。

創刊号には「規約」が記載されている。その中の研究会の「目的」に、「日本の鍼灸の歴史と現状を踏まえて、鍼灸の分野に内在する諸問題を分析し将来に繋げる」とある。では、「鍼灸の分野に内在する諸問題」を、どのように考え、具体的に問題としたというのであろうか。

そこで、創刊号の「設立趣意書」を見ると、(10年前の当時には) 設立する大学が増え、科学的な研究が増加することが予測されるとしながら、「しかし、日本の鍼灸研究は、医学的な見地からの基礎研究や臨床研究が中心で、他の研究分野や研究者の数は少ない。」と分析し、「このことは、本分野の学術的発展を考えると、その思想的、哲学的基盤が脆弱な、総合力に欠ける分野になってしまうことが危惧される。」とした上で、「日本における鍼灸の社会的な立場や地位を歴史的、社会的に的確に把握し、現代および将来において、鍼灸(臨床分野だけではなく)へ投げかけられる諸問題に的確に答え、かつ社会変動に迅速に対処することができる力量を備えることが、現在の日本鍼灸界に必要なことを強く感じている。」と述べ、研究会への参加を呼びかけている。

確かに、この10年間に、社会鍼灸学として、日本鍼灸の社会的な立場は、歴史的に、現状分析的に把握してきたし、問題も見えてきたと思う。だが、社会の変動に対して、日本鍼灸が抱える問題を明確にし、どう対処すれば良いかはまだ示せていない。それを示すための研究が不足している。だとしたら、社会鍼灸学の歩みは、まだ道中半と言わざるを得ない。

その意味では、鍼灸を社会学的に検討する視点は、まだまだ必要だと考える。

『社会鍼灸学研究 第10号』は、社会鍼灸学研究の一つの節目となる号であり、同時に、次の号への出発点となる号であると言えよう。今後、より多くの論文が投稿され、鍼灸が社会的に議論されることを期待する。